



岩槻正志

いわつさまさし●宮城県出身。1973年理学部卒業。日本電子株式会社入社。製造本部、技術本部開発部、米国駐在等で活躍のち、代表取締役兼副社長執行役員就任。2008年より本学客員教授も務める。

## 刺激の成果

「当時の時代背景もあって、正直、山形大学には流れで入学しました。しかし、山形大学に入ったからこそ現在の自分があるのだと、山形の静かな環境や人間味あふれる地元の人々に心から感謝しています」と語るのは、1973年に理学部を卒業した岩槻正志さん。現在、電子顕微鏡をはじめとする理科学計測機器や医用機器など幅広く手掛ける理科学機器メーカー「日本電子株式会社」の代表取締役兼副社長執行役員、統括開発技術担当として国内外を飛び回る多忙な日々を送っている。

大学では物理学を専攻し、卒論テーマは結晶構造回折。蔵王の頂上で採取した雪結晶の氷晶核や樹氷の成長過程についての研究に取り組んだ。サークル活動は弓道部に所属。また、家庭教師をはじめ、デパートや果樹園、製菓工場、ボーリング場など、学費捻出のためにさまざまなアルバイトにも精を出した。それらの経験もあってか、当初は教員志望だった岩槻さんは海外駐在を指向するようになり、海外展開に積極的なグローバル企業への就職を目指すようになった。結晶構造の研究で使用した電子顕微鏡に導かれるように現在の会社に入社し、担当教授に学んだ真摯で実直な研究スタイルで最先端の電子顕微鏡や半導体機器の研究開発に取り組み、4年間の米国駐在も含め、さまざまな部署で要職を歴任。大学や研究機関、半導体や医療機器メーカーなど、ビジネスの対象が変われば、考え方やスピード、ビジネススタイルもまったく異なることを肌で感じた。当然、海外の人々と接する機会も多く、おかげで柔軟に物事に対応する能力が随分鍛えられたという。

多忙を極める岩槻さんだが、本学客員教授として後進の育成にも尽力している。科学することやモノ作りの楽しさを若い世代に伝えたい、と教壇に立つ。とりわけ、計測検査機器の話には熱が入る。科学技術や新しい産業育成のためには必要不可欠な装置なのだ。今後は、山形の地場産業との協力も視野に最先端の装置づくりを目指す。一度は海外に出て刺激を受けた上で、日本の将来を語るような若い人材が育ってくれることを切に願っている。



# 山大聖火リレー



モノづくりを支える装置づくりに誇り。  
今後は、山形の地場産業とのコラボも視野に。

岩槻正志 日本電子株式会社 代表取締役兼副社長執行役員



米国駐在時のアリゾナ州立大学サマースクールにて。カーボンナノチューブで有名な飯島澄男先生と岩槻さん(二列目左から2人目と左端)とのちの電子顕微鏡界のリーダーたち。



客員教授として母校の教壇に立つ岩槻さん。後輩たちを前に自らの専門分野である電子顕微鏡の原理や先端技術、電子ビームを用いた応用技術等についてわかりやすく紹介。